

## ＜卒都婆小町＞の未来 ー 壮衰の因果を超えて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00050864">https://doi.org/10.24517/00050864</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 〈卒都婆小町〉の未来——壮衰の因果を超えて——

西村 聡

### 1. 『玉造小町子壮衰書』に未来を読む

古来空海作説の流布して来た『玉造小町子壮衰書』はそれぞれ長大な序と詩から成る（以下、本文の引用は岩波文庫本〈枳尾武校注、一九九四年七月〉の訓読による）。序はまず「予」が出会った老女の異様な風体を描く。続いて「予」の問いに答えて、老女が身の上話を語る。身の上話は「吾は是れ倡家の子、良室の女なり。」で始まり、「仰ぎ願くは諸仏、必ず孤身を導きたまへ云々。」で終わる。その間一九八行、内一四二行を驕慢甚だしかった壮時の回想に費やし、楊貴妃・李夫人をしのぐ絶世の美貌、三皇五帝の後や漢主・周公の妻にも例を見ない衣食住のおごりを縷述する。三千人の名声を兼ねた壮時は、しかし実は十五六歳の一、二年に過ぎず、早くも十七歳の年、母を亡くして虚飾の生活は暗転する。気がついてみればすべてを失い、老女はその零落ぶりを三〇行で振り返る。老衰の現在を仮に百歳とすれば、老女は八十年余の貧孤に喘ぎ続けている。それでも僅かな蓄えは仏事に捧げて来たと言うから、昔と今を対比して仏道への帰依を志すこと（二〇行余を割く）にかけても、母を亡くして以来の筋金入りと見るべきであろう。

身の上話を聞いた「予」はその内容を自らの言葉に置き換えて再構成した。そして心打たれて

世の無常を説諭するというより、老女の志に触発されて仏の教えを讃歎する詩を作る気になつたらしい。詩は「路頭に老嫗有り」で始まり、「凡そ仏乘を讚へんが為に、筆を乗りて斯の詩を作る。」で終わる。全二六〇句の始まりは「顛顛」、「瘦疲」、「霜蓬」、「凍梨」など序と同じ語を使用してしばらく序の表現をなぞり、続いて老衰の現在から、父母と死別して恩愛を思う日々や、獵師に嫁いで子育てと貧窮に瘦せ疲れ、殺生の罪を重ねる夫に心を痛める日々を回想する。富貴の壮時と老衰の現在の間には、そうした八十年余の苛酷な時間が堆積している。老女は絶望的な時の流れのなかで富貴の壮時を懐かしみするが、比べてみれば時の流れは押し戻せないと思ひ知るだけである。今なすべきは懐旧悲嘆ではなく、死後の苦しみと備えて仏道に帰依すること。それが分かつていながら、序の老女はその経済的な基盤がないと愁訴していた。「予」は老女の志を励まし、極樂安樂国に生まれる幸せを説いて、「予」自身や読者をも超越的な歡喜の未来に誘う。

序に縷述されるおごりを極めた壮時の暮らしは娑婆に例を見ないと言つても、極樂世界の清淨の輝きには及ぶべくもない。そうと思ひ至れば美貌の記憶と同じく急速に色あせて当然である。対比されるのは虚飾の過去（娑婆の極樂）と歡喜の未来（死後の極樂）であり、現在はその轉換点としなければならぬ。読者は「壯衰書」の書名から《壯》と《衰》の対比や両者の因果關係が序と詩で繰り返される先入観を抱くであろうが、読者も含めて志向すべきは輪廻を抜け出すことに違ひない。書名がかえつて見えにくくしている「予」の主張は、「極樂浄土を微細に描いて」（岩波文庫本解説）、発心・往生を促すことに重点がある。極樂往生という未来を確定するために、

老女は過去の業因を懺悔して滅ぼし、発心しなければならぬ。罪障懺悔に身の上話をする老女は発心する直前まで来ているのに、娑婆の人間は憐れみの視線しか向けることをしない。と、読者は気づくことになる。

## 2. 壮衰の因果より無常を読む中世

『玉造小町子壮衰書』の書名にはいくつかの異称が伝わる。老女は「予」の問いに名前を答えていないから、本来架空の老女の「壮衰書」にその後「玉造小町子」の部分が冠せられたと思われる。「壮衰書」の部分は「形衰記」の形も行われた（九条家旧蔵本、劔阿手沢弘法大師御作目録等）。平安末期、藤原清輔の『袋草紙』には、上巻「諸集の人名の不審」の項に小野小町を挙げ、

衰形伝の如きは、その姓玉造氏なり。小野はもしくは住む所の名か。ただしある人云はく、件の伝は弘法大師等の作る所なり。小野は貞観比の人なり。かの衰形は他人か。（引用は新日本古典文学大系本による。なお日本歌学大系本は傍線部を「壮衰形伝」とする）

と記している。この記事からは、序にも詩にも見えない「玉造小町子」がすでに書名に冠せられ、小野小町と同一視する読み方と、作者空海説との先後の矛盾から別人説に立つ読み方が並存していたこと（顕昭・長明・親房らの歌論でも別人説に言及する）、さらに「壮衰書」ではなく「衰形伝」の称が通行していたことが知られる。傍線部については、日本歌学大系本の「如壮衰形伝」を「壮衰ノ形、伝ニアルガ如シ」と訓読する場合もある（片桐洋一『小野小町追跡』〈笠間書院、

一九九三年一月改訂新版)。

『袋草紙』にはもう一カ所、上巻「希代の歌」の項に、小野小町死後の「亡者の歌」を記載する。ある人の夢に目から薄の生えた者が「秋風のうちふくごとにあなめあなめ小野とはいはじすすき生ひたり」という歌を詠ずることがあり、その人が夢から覚めて後、野原を尋ねて目から薄の生えた鬮體を見つけたと伝える。『長明無名抄』はその野を陸奥の国玉造の小野、歌の下旬は在原業平が付けたとする説を記載している。場所がどこであれ、死を悼む者がだれであれ、中世における小野小町伝の理解では、玉造の小野で生を終えた小町は鬮體の目から薄が生えて目が痛むと訴え、それは死後の苦しみを示唆すると受け止められた。老女小町が『玉造小町子壮衰書』の「予」と出会ったかいはなく、むしろ死後に救済者を待つ身とされる。そして『玉造小町子壮衰書』の主題は、次の諸例のとおり、小野小町の老衰・貧窮に絞り込んだとらえ方が一般的となる。

小野小町が、おひをとろへて、貧窮になりたりしありさま、弘法大師の玉造といふ文にかき給へるこそ、あはれにかなしく侍るめれ。：(『宝物集』巻第三(新日本古典文学大系本))

大師の玉造を見るに、小町衰弊の後相坂の辺に住けるを大師御らんじて、其すがたをあそばたれりと見へたり。：されば大師只小町が好色にすつれたりしかば、かゝるいみじきものもおとろへはつる事ありといふ事を人に知せんとして、：(『冷泉家流伊勢物語抄』六十二段(片桐洋一『伊勢物語の研究(資料篇)』明治書院、一九六九年一月)。傍線部ママ)

小野小町がこと、極めて定かならず。衰へたるさまは玉作といふ文に見えたり。：(『徒然草』)

第七十三段（新日本古典文学大系本）

『玉造小町子壮衰書』はこのように読まれてきた。中世の読者は何より老女の「姿」や「有様」に目を奪われる。壮時の娑婆の極楽は老女の思い出であり、思い出は無意識のうちにも粉飾される。死後の極楽も生前の作者が言葉尽くしたところで体験記としての説得力には欠ける。どちらも狂言綺語の罪に当たらないのか。仏乘を讃えるためなら、あるいは作者が空海なら、許されるであろうか。そう考えると、希有でも實在感のある老女の「形衰」、「衰形」に注目し、意味を見いだすことが先になる。小野小町の「壮衰」は、因果関係よりもその変化の早さ、序の言葉に置き換えれば生老病死の無常を表す好例と見なされる。

### 3. 壮衰の教訓と菩薩の帰還

因果関係については、『古今著聞集』巻第五・「小野小町が壮衰の事」(『十訓抄』二ノ四もほぼ同内容)に、小野小町はどんな男でも見下して、ただ女御・后となることだけを望み、程なく単孤無頼の身になったとする。同書は「壮衰記」を参照しながら、「壮衰記」には父母・兄弟が求婚者を拒むとするのに対して、小野小町自身に零落の原因となるおごりや野望を読み取ろうとしている。また、『平家物語』巻第九・「小宰相身投」には、やはり小野小町が男たちを心強く拒むという評判が立ち、彼らの思いの積もった果てに野草で命をつなぐ境涯になったとする。『平家物語』は『玉造小町子壮衰書』の影響を明示しないが、『古今著聞集』『十訓抄』同様、老衰の形よ

りは《壯》と《衰》の因果關係に目を向け、小野小町の轍を踏まないようにと、平通盛を拒む小宰相を上西門院が教訓する例示に利用している。中世にはそういう読み方、利用の仕方もあった。

教訓的な壮衰の極致を生きたのは、小野小町が並みの人間ではなく、馬頭観音の化身ゆえとも考えられた。前掲『冷泉家流伊勢物語抄』の引用続文にそのように記される。『書陵部本和歌知識集』には在原業平が馬頭観音（歌舞の菩薩）、小野小町は如意輪観音であるとされ、二人は衆生救済のために「たはれを」、「たはれめ」の姿で化現したと解されている。野原に髑髏をさらす最後も、その役割の重要な一部であったことになる（『冷泉家伊勢物語抄』は陸奥の国ではなく相坂〈逢坂〉関寺辺に屍をさらすとする）。すると、「たはれめ」の容貌は理想美を備えたはずであり、髑髏をさらした後は極楽世界へ戻ったはずである。

室町中期成立の説話集『三国伝記』は、卷第十二・第六「小野小町盛衰事」に『玉造小町子壮衰書』を引用するにとどまらず、十話ほどの説話において小野小町とは別の美女や美少年、老人の形容にも『玉造小町子壮衰書』の表現を借用している。つまり、『三国伝記』の撰者玄棟は『玉造小町子壮衰書』を机辺に常備し、裝飾表現の典拠とすることを頻繁に行った（拙稿『三国伝記』の裝飾表現）『説話・物語論集』12、一九八六年（二月）。その「小野小町盛衰事」は、小野小町の出身地を近江の国玉造荘、髑髏をさらした野原は会坂（逢坂）関寺辺、髑髏は弘法大師が高野山に収めて弔い、小野小町は天上界に生まれる果報を得たとする。それは小野小町に臨終が近づき、自ら野辺送りに出る際、草庵の柱に書き付けた歌が、死後空海の目に留まったことによる。

撰者玄棟は、小野小町が無常の理を深く悟った晩年に、こうして未来の果報の種子を認める。晩年の悟りもその結果は壮衰の自覚がもたらした。《壮》の報いとしての《衰》ではなく、壮衰を超えるため、その姿を衆生に示すための因果関係と言える。

#### 4. 百夜通いの目標を掲げたのはだれか

『玉造小町子壮衰書』から決定的な影響を受けた作品には、『三国伝記』以前に能(卒都婆小町)がある。同書からのまとまった引用は二カ所で行われる。一つ目は舞台に出たばかりの老女が「百年の姥」に注がれる視線をはばかり、都を離れる際の独り言の述懐に(2段「サシ」、二つ目は老女が卒都婆問答でワキ僧を言い負かした後、小野小町になれる果てを名乗り、名前の喚起する像との落差を確かめる二人の応酬に(4段「サシ」)、「ロンギ」)、『玉造小町子壮衰書』の序と詩の表現を種々組み換えた引用が行われる。一つ目の引用(傍線部)は次のとおりである(二つ目は省略する)。

あはれやげにいにしへは、橋慢もつとも甚だしう、翡翠の髪ざしは婀娜とたをやかにして、楊柳の春の風に靡くがごとし、また鶯舌の轉りは、露を含める糸萩の、託言ばかりに散り初むる、花よりもなほ珍しや、今はりんかん賤の女にさへきたなまれ、諸人に恥ぢをさらし、嬉しからぬ月日身に積もつて、百年の姥となりて候。(引用は日本古典文学大系本による)

今はいにしえとなつた若い頃は美しい髪と声に恵まれておごりをなし、うれしくもない年を

取つて百歳の老女となつた。汚がられ恥をさらすのは、それが耐えがたくて都を出ると言う、今を含む長い晩年の習いである。老女はいにしえと今を対比しているが、今がいにしえの報いとまでは考えていない。報いを自覚しない老女は、発作的な怨念の憑依によつて自覚を強制される。

いや小町といふ人は、あまりに色が深うて、あなたの玉章こなたの文、かき昏れて降る五月雨の、虚言なりとも一度の返事もなうて、今百年になるが報うて、あら人恋しやあら人恋し

や。(5段「問答」)

これはシテの小野小町が発する言葉でありながら、「小町といふ人」を他人としてその罪を指弾している。言い寄る男たちを無視し恋に狂わせた報いが、こうして百歳の老女をワキ僧の目の前で物に狂わせる。物とは百夜通いの狂気を強いられた四位の少将の怨念であり、物は老女の身体に憑依して四位の少将の声で因果の巡りを思い知らせる。傍線部はかつて四位の少将が小野小町に抱いた恋慕の切なさを、今度は小野小町に実感させ声を振り絞らせていることになる。

ここで注目すべきは、四位の少将が虚言なりとも一度でも返事をくれたらよいのにといい、小野小町の冷淡さを「色」に通じた手練と見なし、報いの原因となる罪の核心に位置づけていることである。つまり小野小町の示唆なしに、四位の少将は一方的に百夜通いを敢行し九十九夜目に病死した。四位の少将の自滅は小野小町の知つたことではない。小野小町には罪の自覚がないから、憑依してでも思い知らせるしかない。同じく四位の少将の百夜通いを題材とする〈通小町〉では、「百夜通へ」と偽つた小野小町の虚言が少将の恨みの対象となる。小野小町に約束を守る気

のなかつたことは百夜通いを完遂した日に告げられる。(通小町)では少将の逆上し憤死したはずの場面は再現せずに、二人が成仏を遂げる結末を重視した改作がなされている(拙稿「宗教劇から人間劇へ―鬼を救い生を語る能の流れ―『国文学解釈と鑑賞』74・10、二〇〇九年一〇月)。

二つの能の作品において百夜通いの目標をどちらが掲げたかという違いの意味、そして世阿弥が否定する異性間の憑依が(卒都婆小町)に残された必然性は、このように両作品の「虚言」を視点に比較することで新たな見通しが得られる。

## 5. 未来の果報のために老残を生きる

卒都婆問答に勝利した老女はワキ僧から「まことに悟れる非人なり」と感服・敬礼される。しかし、戯れの歌を詠み勝ち誇る小野小町には、やがて四位の少将の怨念が取り憑く。悟り切れていない隙を突かれた形である。往來の人に物を乞い、乞い得ぬ時にこうなると言うから、年を取り零落するほど、こうなることは頻繁に繰り返されていると見られる。そういう老後の絶望的な時間が小野小町を鍛えて、ワキ僧に負けないしたたかな物言いを身につけさせるとともに、四位の少将を破滅させた罪の報いを自覚させ、次第に悟りに導いてゆく。

これにつけても後の世を、願ふぞまことなりける、砂を塔と重ねて、黄金の膚こまやかに、花を仏に手向けつつ、悟りの道に入らうよ、悟りの道に入らうよ。(7段「ギリ」)

長い晩年を生きること、憑依による狂乱を含む、種々の屈辱に耐えることは、罪を消す試練と受

け止め、卒都婆に近づき菩提心を起こす今日のような機会を大切にしたい。思い切って都を離れ西（月の行く方）へ向かう行動に出てみると、怨念はなお付きまとうにしても、老女を正視して敬意を払うワキ僧たちとの出会いがある。彼らと卒都婆問答を交わして、現在到達している水準と慢心の残る限界を確かめることもできた。この上は後世の幸せを願ひ、童子が砂を集めて仏塔を造るように、無心にささやかな供養を積み重ねるつもりである。

因果応報は過去と現在、現在と未来の間に働く。小野小町にとっての過去と言えば前世は問題にならず、現世の内のいにしえが老衰の今と対比される。『玉造小町子壮衰書』の老女と異なるのは、小野小町が恋の道に熟練するだけの年齢に達して、家族の野心ではなく自分の意図で男たちを拒み（前述の『古今著聞集』等に通ずる）、その罪の現報を憑依により体現するところである。殺生を生業とする獵師の傍らに拘束される暮らしや、自らは断ち切れない老後の永続も、おごりを極めた現報と見てよいであろうが、百夜通いの罪と報いはそれらに増して因果の関係を分かりやすくする。異性間の憑依に否定的な世阿弥が〈卒都婆小町〉を残した理由、〈卒都婆小町〉が人氣曲たり得るゆえんはその分かりやすさに認められる。〈卒都婆小町〉では『玉造小町子壮衰書』のように極楽世界を讃歎することに言葉を費やさない。しかし、〈卒都婆小町〉の観客は小野小町が西方の浄土に到着する未来を疑わないであろう。《壮》も《衰》も尽くす小野小町にとっては、それが最後の役割であると想像される。

〔附記〕本研究はJSPS 科研費 26370203 の助成を受けたものです。